

松山学院 総合V9

四国高校選手権

自転車の四国高校選手権最終日は7日、松山市の瀬戸風バンクであり、松山学院勢が全4種目を制した。総合順位は9連覇9度目の優勝となった。

自転車

◇上位と差優勢の瀬戸風バンク
主成績◇

▽男子3000個人追い抜き
①松田奏太郎(松山学院) 3分24秒196
▽スプリント ①山崎晋輝(松山学院) 11秒308
▽スクラッチ ①松田奏太郎(松山学院) 10分55秒250
各務(松山学院)
▽ケイリン ①日高虎太郎(松山学院) 11秒490
②吉田(松山学院)
◇総合順位 ①松山学院107点
②高松142点
③小松島西31点
④松山17点
(松山学院は9連覇9度目の優勝)

2種目頂点

松田存在感

松山学院の主力、3年の松田奏太郎が2種目で頂点に立ち、存在感を示した。

まずは得意の3000個人追い抜きで圧倒的な走りを見せ、7周半のレース中、勢いが全く衰えない。半周先からスタートした相手



【男子3000個人追い抜き決勝】最終周でラストスパートをかける松山学院の松田奏太郎(手前)―瀬戸風バンク

めかせた。約1時間後には8キロで競うスクラッチに出走し、トップでゴール。中長距離での対応能力の高さを示



【ケイリン決勝】1位に輝いた日高虎太郎(左)と2位吉田楓芽の松山学院勢―瀬戸風バンク

後輩2位励みのレース

「よくやった」。ケイリン決勝、トップでゴールした松山学院3年の日高虎太郎は思わず叫んだ。自分に対してではない。真後ろを走り、2位となった後輩の2年吉田楓芽への祝福だった。

目標は自身の優勝。同時に、後輩に自信をつけてもらおうとの思いもあった。位置取りなどで助言しながら自身は先頭を走り、レースを先導。最終周、競り合いからの落車事故が後方で起こったが、2人は難を逃れワンツーフィニッシュを決めた。

ケイリン優勝 日高祝福

日高は昨春秋、滋賀国民スポーツ大会の同種目で落車事故に遭い、左鎖骨を骨折。今もポルトで固定している。事故以降、調子に波があるものの、全国高校選抜では1000キロタイムトライアルで全国0位の頂点にも立った。自身の直後に後輩をゴールさせるの思いをかなえた日高は「吉田の励みになるレースで良かった」と総括。最後の夏、最後の追い込みに向けて気合を入れていた。

(宇和上翼)

四国高校選手権

松山学院勢4種目V

自転車の四国高校選手権を制した。手権は6日、松山市の瀬戸風バンクであり、大会新をマークした男子チームスプリントなど松山学院勢が4種目



- 自 転 車**
- ▽男子チームスプリント ①松山学院(日高、松田、山崎) 1分14秒85 ②小松西 1分21秒6 ③松山工 1分21秒8 ④高松山聖陵 1分23秒4
 - ▽4000m団体追い抜き ①松山学院(井上、日高、松田、山崎) 4分26秒8 ②高松工 4分30秒0 ③小松西 4分34秒0 ④高松山聖陵 4分38秒0
 - ▽1000mタイムトライアル ①松山学院 1分33秒0 ②日高 1分34秒0 ③松山工 1分35秒0 ④高松山聖陵 1分36秒0
 - ▽4000m団体競走 ①徳弘一 13分19秒6 ②将尚(宇佐美) 4分41秒5 ③吉田(松山学院) 4分45秒0 ④田中(松山学院) 4分48秒0
 - ▽ポイントレース ①井上悠季(松山学院) 75点 ②松田奏(松山学院) 31点 ③山崎(松山学院) 20点
 - ▽女子200mタイムトライアル ムトラアル ①井上悠季(松山学院) 12秒0 ②高松工 12秒4 ③松山工 12秒8 ④高松山聖陵 13秒0
 - ▽3000m個人追い抜き ①土肥夏子(高松工) 4分11秒2 ②高松工 4分14秒2 ③高松山聖陵 4分17秒4 ④高松山聖陵 4分17秒4

①男子チームスプリント決勝)日本ジュニア記録を上回るタイムをマークし優勝した松山学院のメンバー(左から)日高、松田、山崎) ②男子チームスプリントを制した(左から)日高、松田、山崎)いずれも瀬戸風バンク



堂々大会新「30年は抜かれない」

男子チームスプリント 全国屈指3年3人

「今後30年は抜かれないようなタイム」。松山学院は男子チームスプリントで1分14秒854の大会新をマーク。2年前のインターハイで同校が樹立したジュニア日本記録を0秒6ほど上回る圧倒的な記録を競い監督は手放しでたたえ、力を出し切った3人の3年生も「正直驚いた」と喜びの声を上げた。

競技は3人でチームを編成。1周4000mごとに先頭の1人が離脱し、3周の合計タイムで競う。松山学院は日高虎太郎、松田奏太郎、山崎帝輝と全国屈指の実力者で組んだ。

まず短距離型の先頭日高が見せた。「最初の半周は苦手だが、とにかく全力でいく」と早々にトップスピードに乗ると、中長距離型の2番手松田はギアを軽めに設定。代償として「後半は速度を落としたものの、最後まで懸命に耐えた。アンカーはスプリントに強い山崎。「みんなの力を合わせて最後まで出し切る」。スピードを維持して駆け抜けると、ゴール後には太ももの痛みで何度も悲鳴を上げた。

大会運営の規定によりジュニア日本記録の更新はならず。それでもインターハイに向け、3人は「まだまだタイムを上げられる」「重たいギアで速度を上げた」と元気いっぱい。さらなる記録更新に自信を示した。(和田亮)